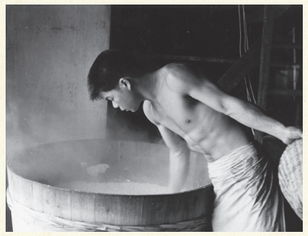
特集 1

泡盛の歴史

日常の酒宴から伝統行事、お祝いごとまで
私たちの暮らしに根づいたお酒、泡盛。
その泡盛と首里には、長い歴史がありました。
泡盛のルーツから戦後の泡盛復興までを振り返ります。

▶戦前の首里三箇
（写真提供：那覇市歴史博物館）



（写真提供：瑞穂酒造（株））

泡盛は日本最古の蒸留酒！

泡盛は一四〇〇年代後半にはすでに琉球で造られていたと考えられ、約六百年の歴史があるとされています。そのルーツは、東南アジア・タイや、中国からも蒸留酒の酒造りが伝来したと考えられています。

泡盛が歴史上に初登場するのは、薩摩の島津家に残る一五七五年の記録。交易船で琉球から来た使者が「唐焼酎一甕、老酒一甕、焼酎一甕」を携えており、この焼酎が泡盛であった可能性が高いと考えられます。また、使者は「六十年前と同じ贈り物を携えていた」という内容から、一五一五年にも焼酎（泡盛？）を贈っていたと考えられます。朝鮮の歴史書「朝鮮王朝実録」一四六一年の条には、「那覇の港には城（御物城）があり、酒蔵は一年もの、二年もの、三年ものに分けられていた」という内容から、琉球では一四六一年から酒を古酒にして飲む習慣があったこともわかっています。

琉球王朝時代以来のブランド品

十八～十九世紀、泡盛造りは王府が管理するようになり、首里三箇（赤田、崎山、鳥掘）でのみ製造されるようになりました。王府は焼酎職と呼ばれる約三十人に製造を許可し、原料や蒸留器なども徹底的に管理していたようです。

泡盛は一六七一年には江戸の徳川幕府への献上品のお品書きに入れられ、薩摩の島津家などを経由して、江戸へかなりの量が運ばれました。「和漢三才図会」（寺島良安編集／一七一二年）からは、江戸では琉球の泡盛を薬として珍重していたことがわかります。また儒学者、新井白石の「南島志」（一七一九年）には、泡盛は「首里釀すところのもの最上品とす」という記述もあります。

ペリーが一八五三年に軍隊を率いて沖縄へ来た際、王府側が開いた晩餐会では古酒がふるまわれ、海外からの来訪者を接待するためにも泡盛が用いられたことがわかります。泡盛は王朝時代から日本や世界に誇る「ブランド品」だったのです。

（写真提供：瑞穂酒造（株））

首里から始まった戦後の泡盛復興

明治から昭和初期まで、首里三箇にはサカヤー（泡盛製造工場）が密集していました。昭和四年の調査では県内の全酒造所のうち、約三分の二がここにあったといわれ、昭和初期には県外へも売り上げを伸ばしました。

しかしながら沖縄戦で、首里は米軍のすさまじい砲撃を浴びせられ、酒造所も灰の下に消滅してしまいます。密輸された酒が横行する終戦直後、軍政府は県内各地に五つの酒造廠を造り製造を許可しますが、肝心の黒麹がなければ泡盛は造れず、イースト菌などで代用するしかありませんでした。

そんな中、首里酒造廠を任されていた佐久本政良氏は、米軍の攻撃で木っ端みじんにされた泡盛工場跡で、土に埋もれたニクブク（藁のようなもの）から黒麹菌を採取することに成功します。焦土と化した首里の土の中で奇跡的に生きていた黒麹菌により、泡盛の本格的な復興が進んでいきました。

参考：
沖縄県酒造組合連合会「泡盛百科」
http://www.okinawa-awamori.or.jp/

特集 2

清らかな水の都・

首里を訪ねる

首里のまちは那覇市内でも標高が高い丘陵地にありますが、水源涵養（かんよう）力の高い琉球石灰岩を基礎としているため、首里城内や集落には多くのカー（共同井戸）があります。この豊富な水の存在が、琉球王国の都として栄えたことを示しています。

かつては泡盛以外にも、豆腐やモヤシづくり、紙漉きなど、水を活用した産業が生まれました。人々を育んできた清く・美しい水源は、今日の首里でもみることができます。

【歴史資源】

龍樋（りゅうひ）
王宮の飲料水。龍の口から湧水が湧き出していることからそのように名付けられた。中国皇帝の使者・冊封使が訪れたときには、那覇港近くの宿舎まで、水を運んだといわれる。

金城大樋川（カナグシクウフヒージャー）
金城町の石畳道に近くにある金城町の共同井戸。琉球石灰岩のあいかた積みが見事。

仲之川（ナーカヌカー）
金城大樋川・寒水川樋川の中間にある樋川。日照りでも水量が変わらず、雨が降っても濁らないので他村からも水を汲みにきていた。

寒水川樋川（スンガーヒージャー）
清水を意味し、寒川町の地名の由来になった井泉。同じ名前を持つ井泉が首里城内と赤田町にもある。

崎山樋川（サキヤマヒージャー）
瑞泉酒造の近くにある井泉。王国時代、吉方が巳の方位（南南東）にあたる年の元旦に、国王に献上する若水を汲んだといわれる。

さくの川
王家御用の芭蕉紙をすいていた共同井戸。

宝口樋川（タカラグチヒージャー）
真嘉比川沿いにある共同井戸。崖下に造られていて、崖壁を覆う石積みや樋川の前の石畳も見応えがある。近くに王府の紙漉所跡があり、紙漉きが行われていた。

水の文化財MAP

崎山樋川

仲之川

龍樋

琉球泡盛を守り育てる 首里蔵元会

泡盛の里・首里に現存する四酒造所で構成された首里蔵元会では、「首里い～ま～る会」等のイベント開催や限定商品の販売を通し、泡盛の普及活動に取組んでいます。

識名酒造
沖縄で初めて泡盛を瓶に詰め商品名を付けて販売した酒造所。150年以上経つ最古の古酒が家宝として存在し、「美味しんぼ・幻の古酒を求めて」のモデルになったことでも有名。

瑞泉酒造
首里城の瑞泉門にあった泉にあやかり名付けられた歴史ある酒造所。奇跡的に発見された黒麹菌で幻の泡盛を蘇らせた酒造所としても知られている。

瑞穂酒造
嘉永元年に鳥掘町で創業した伝統ある酒造所（昭和４４年に末吉町へ移転）。地下貯蔵庫「天龍蔵」では酒蔵見学も行っており、古酒の試飲も楽しめる。

咲元酒造
王朝時代からの泡盛造りを受け継ぐ由緒ある酒造所。創業時の佐久本酒造から「さき」＝酒、「もと」＝泡盛の原点をもじって「咲元」と名付けられた。